

野宿の王将

たくき よしみつ
鐸木能光

「野宿の王将、村川千亜紀と対戦！」

企画書の冒頭には、斜体のかかった拡大文字で、そう書かれてあった。

「……まあ、実力がどうのこうのというより、キャラクターが面白ければ掘り出しもんってことだわな。しかしまあ、場所が山谷だからなあ。下手するとまた人権屋さんからクレームが来たりして、シャレになんないって恐れもあるわな。そのへんは十分注意しなければならんわけけど……」

プロデューサーの勝村が、一ページしかないその企画書をヒラヒラと振りながら内容を説明する。

僕は、まるで墜落飛行機の搭乗者名簿に身内の名前を見つけてしまったように、茫然とその企画書を眺め続けていた。

「野宿の王将、村川千亜紀と対戦！」

東京の山谷に、『野宿の王将』と呼ばれる将棋の天才がいるらしい。神社の境内の片隅でダンボールにくるまって暮らす老人だが、未だに彼に将棋で勝った者はいないという。平手戦（ハンデイなしの対局）はもちろん、六枚落ち戦でも軽々と勝つというその老人の実力をさぐるべく、美人プロ棋士・村川千亜紀四段が乗り込む！」

その企画は、『どんぺいの天才倶楽部』というバラエティ番組のためのものだった。

お笑い界の頂点を極めた人気タレント・東どんぺいが、毎回「部下」たちを使って、世の中の奇人・変人、隠れた天才などを発掘し、紹介するという番組で、うちが制作している番組ではトップの視聴率を誇っている。

全国から集まってくる自薦、他薦の情報を元に、毎回五人から六人の「天才」が登場する。番組の成功、不成功は、ほとんど取材前の段階でのネタ選びで決まると言っても過言ではない。

この「野宿の王将」という企画は、外からのものではなく、番組の構成作家・木村が、行きつけの呑み屋で仕入れてきた情報が元になっているらしかった。

「……で、どうかな。野崎ちゃん」

「はい……?」

勝村プロデューサーにふいに名指しされ、僕は思わず寝ぼけた返事をした。

「はい? じゃなくてさ。下調べをして、絵になりそうなら、千亜紀の事務所とかけ合うという手順になるんだけどさ……」

果たしてそういう人物が本当にいるのかどうか、いたとして絵になるタマなのかどうか、僕に調べてこいと言いたいのだ。

僕はまだ困惑していたが、やはり白状することにした。

「実は……僕、知っているんですよ。その人」

「えっ?」

勝村だけではなく、企画会議に居合わせたスタッフ全員が一斉に僕のほうを見た。

∟ 11 E

企画会議の翌日、僕は若手構成作家の木村を連れて、さんや山谷に向

かった。

僕にとつて、それは二十年ぶりの里帰りのようなものだった。

山谷という地名を知っている人はいても、それが正確にどこを指すのかを言える人は意外と少ない。

ある古い百科事典にはこう記載されている。

「東京都台東区北部の一地区。大阪の釜ヶ崎と並び称される簡易宿泊所密集地域」

ただし、今は地図の上に「山谷」という地名はない。清川、日本堤、東浅草といった町名に分割されている。明治通りと泪橋で交差する山谷通りも、いつの頃からか「吉野通り」と呼ばれるようになった。

山谷の中心部は、清川二丁目の玉姫公園周辺だ。

玉姫公園は山谷の住人の交流場所兼野宿場所になっていて、異文化地域という感がある。

僕は小学校高学年から中学一年の冬休み前までの数年間、この玉姫公園のすぐ横にある都営住宅に、お袋と二人だけで住んでいた。

父親のことはほとんど何も知らない。僕が生まれた直後に死んだ……と、お袋は言うのだが、本当かどうか。戸籍謄本には父親の名前は記載されていない。それも今ではどうでもいいことだが。お袋は十八のとき僕を産んだ。以後、女手一つで僕を育てるのに相当苦勞したが、三十のとき、つまり僕が中学に進んだとき、そこそこの金を稼げる男と結婚した。

相手の男はお袋より一回り年上で、再婚だったが、子供はいなかった。

お袋の再婚によつて、僕たちは山谷から東京郊外の狛江市へ移り住むことになった。

「抜けられるのね、ここを」

引越しの日、玉姫公園の一角から上がる焚火の煙を見ながら、お袋がぽつんとそう呟いたのを、今でもよく覚えている。

しかし、その言葉の意味を、僕はそのときはよく理解できなかった。

その後、僕は新しい父親の経済力のおかげで大学まで進むことができ、今は、あるテレビ番組制作会社のディレクターをしている。

山谷での数年間の記憶は年々薄れていくが、あそこを「脱出すべき空間」と思ったことはなかった気がする。もちろん、今ではあのときお袋がどんな感慨を持って山谷を出たかはよく分かるが。そのお袋は、二年前に肝臓を患って死んだ。

「ねえ、野崎さん。その『山谷の王将』ってじいさんと、本当に知り合いなんですか？」

BMWカブリオレのステアリングを握っている木村にそう声をかけられ、僕の回想は一時中断した。

木村はまだ二十代半ば、大学を卒業したばかりの番組構成作家だ。大学在学中からクイズ番組や素人参加番組を通じてテレビ界に顔売り、卒業する頃には企画事務所の社長を名乗っていたという如才ない男だ。最近はコラムニストとしても結構名が知られるようになり、深夜番組などにゲストで出演することもよくある。恐らく年収はずっと年上の僕とは一桁違う。車も、このBMWの他にもう一台何か持っていたはずだ。

それにしても、これ見よがしに屋根を外してフルオープンで走るのはなんとかしてほしいものだ。周囲を走る車の排気ガスが容赦なく襲ってくる。いくらよく晴れた穏やかな日であっても、都内をオープンカーで走るものではない。

「知り合いつてわけじゃないさ。それにもう二十年も前、俺がまだガキだった頃の話だから、向こうは覚えていないだろうね」

「なーんだ……。じゃあ、初対面と同じじゃないですか」

そう言うと、木村はずり落ちかけていたサングラスを左手の中指でひよいと持ち上げた。

そう。確かにその通りだ。

でも僕の中では、今でも山谷や慎さんに対する特別な思い入れが渦巻いている。できることなら、テレビカメラなどを向けたくないという気持ちは、山谷に近づくにつれ強くなっていく。

慎さん……。本名は知らないが、周りからはそう呼ばれていた。彼は仲間たちから一人ぼつんと離れ、玉姫公園に隣接する玉姫神社の境内の隅に、安物の将棋盤を出して座っていた。歳は五十代半ばくらいだったろうか。ということは、今では相当な老人だということになる。

当時小学生だった僕は、学校の帰りによく慎さんのところに寄っては、将棋の手ほどきを受けた。

父親を知らずに育った僕にとって、慎さんは疑似的な父親だったと言ってもいいかもしれない。将棋は半ば口実で、本当は慎さんと一緒に過ごせる時間そのものが楽しかったのだ。

将棋に関しては、慎さんは山谷では無敵を誇っていた。とにかくやたらと強くて、王将と歩だけでも、ほんの数分で僕を負かした。

中学生になってからは、ようやく平手戦をしてもらえるようになったが、それも何手まで持ちこたえられるかという次元の勝負だった。

それほど強い慎さんだったが、なぜか賭け将棋はやらないという主義だった。時々噂を聞きつけたセミプロが札をひらつかせながら勝負を挑みにくることもあったが、慎さんは相手にしなかった。

「ただの遊びなら相手になるよ。平手でいいのかい？」

そうやって淡々と将棋をさす。相当自信がある者も、一時間もしないうちに、賭けなくてよかったと思ひ知ることになる。

なぜプロにならないのか。正式なプロにならないまでも、大道賭け将棋で稼げるのに……と言う者も多かった。しかし慎さんはそうした雑音に一切耳を傾けなかった。

「俺は将棋が好きなだけさ。遊びで飯食っちゃあ申し訳ねえよ」
そうやって笑うばかりだった。

一度、慎さんの対戦仲間が、「いつまでも戦争を引きずってちやあいけねえよ」と、諭すように言っていたのを見たことがある。その言葉に対して、慎さんは一瞬、僕が見たこともないような怖い顔をしたが、結局何も答えなかった。

まだ子供だった僕には、あの沈黙の意味は分からなかったし、深く考えようとしなかった。慎さんの年代の人はみな戦争体験を引きずって生きているはずで、それが頑ななまでに賭将棋を拒否することとどう結びつくのか、今でも納得はいかない。

結局僕は、慎さんのことを深く知る前に、お袋と共に山谷を去った。そして、いつの間にか二十年が経っていたというわけだ。

あの慎さんに、カメラを向けるのか……。

ひどく抵抗があったが、慎さんとの思い出を他人にかき回されるよりは、自分できちんとした番組に仕上げたいとも思った。

昭和通りを大関横丁で右折し、明治通りに入る。

山谷の中心部にオープンカーでいきなり乗りつけるといのはさすがにはばかられたので、泪橋の手前で木村に指示して路地に入り、適当なところに車を停めさせた。

昔に比べて道は広くなり、風景も随分と変わったが、泪橋を右折したあたりから、懐かしい空気が僕の全身を包み始めた。

人通りが急に多くなる。

裸足のまま、サイズの合わない黒い革のビジネスシューズを履いている老人。作業着のポケットに両手を突っ込み、尻ポケットからタオルを垂らしながら歩く男。それになぜか、厚いフアンデーションを突き破って髭がうっすらと頭を見せ始めている、寝不足顔のオカマが一人……。

一定方向ではなく、まちまちの方向に漂うように歩く彼らは、どこか深海魚を思わせる。何か特別の目的があつて歩いているのではなさそうだ。まるで、歩くのをやめると存在そのものが脅かされるとでもいうふうに、ただ歩き回っている。

逆に、一切の動きを拒否するかのようなグループもいる。毛布やダンボールにくるまり、死んだように路上に寝ている者たち。彼らは海底に潜む、貝類や珊瑚を思わせる。

交番では、巡査が、のんびりと九官鳥のケージを掃除している。木村は、物珍しそうにあたりを見回しながら、僕の後についてきた。

玉姫公園はさながら難民キャンプのようだった。

青いビニールのシートを張り巡らせた不格好なテントの中から、演歌のテープが聞こえてくる。道端では中古の靴やら衣類やらを売っている者たちが並ぶ。

公園と通りを挟んで向かい合う都営住宅は、僕がお袋と住んでいたあの当時と同じ姿で建っていた。その敷地内にある遊び場には中古衣類などがうず高く積みまれ、数人の男女が物色していた。程度のいいものは、ほんの数メートル離れた場所で「どれでも百円」とか「一足千円」などという値段をつけて売られたりもするわけだ。

「なんだか外国みたいですね」

そう呟く木村に返事をすることもなく、僕は公園に隣接する神社へと向かった。

驚いたことに、慎さんは二十年前と変わらず、境内の片隅にダンボールを風除けにして座り込んでいた。その姿があまりにも昔と同じなので、僕は思わず軽い目まいを覚えた。

二十年、ずっとここにいる……そんなことがありえるだろうか？ 木箱の台の上に将棋盤を置き、一人でじつと盤面を見つめている老人を見て、僕は一瞬、自分が知っているあの「将棋の慎さん」とは別人なのではないかと思った。

しかし、近づいて顔を覗き込むと、深い皺が刻まれたものの、目元や口元に、明らかに慎さんの面影があった。

僕は木村を制して、一人、老人の前に座り込むと、盤面を見た。駒はきれいに初期位置に並べられたままだ。

僕は黙って右手を伸ばすと「7六歩」とし、角道を開けた。

老人は僕を見上げると、かすれた声で「平手でいいのかい？」と訊いてきた。

懐かしい台詞だった。

「ええ、お願いします」

と、僕が答えると、慎さんは同様に「3四歩」と角道を開けた。無言のまま駒組は進んだが、勝負はほんの数分だった。

「なんだ、ちつとも進歩してねえじゃねえか」

老人は怒ったように言った。

「すみません。でも、覚えていてくれたんですね、僕のこと」
僕は嬉しさを隠しきれずにそう言った。

「ああ。ここんどこ見なくなっと思ったが、図体だけは随分でかくなりやがったな。いいもん食ってるみてえで、何よりだ」

「ここんどこって……もう二十年ですよ。とつくに忘れられてい
ると思った」

「俺は記憶力だけはいいんだ。顔は分からなかったが、この馬鹿
の一つ覚えみたいな石田流の打ち方でな。この戦法は確かに俺が

教えてやったが、こいつの弱点も教えたはずだぜ」

「ええ……すみません。ちつとも進歩がなくて。でも、この程度でも、素人相手には結構勝つんですよ」

「くっだらねえ」

慎さんは吐き捨てるようにそう言った。

「野崎さん、ほんとに知り合ってたんですね。それなら話が早いじゃないですか」

背後で僕らのやりとりを見守っていた木村が入ってきた。

「いや、実はですね。私たちはテレビ番組を作っているんですが、今度……」

木村はすっかり調子に乗って喋り始めた。

番組のことは、自分で慎重に言葉を選んで話すつもりだった。だからこそ企画を持ち込んだ木村に任せずに、こうしてここまでやってきたのだ。だが、なぜだろう。勢いに乗って喋り続ける木村を制するだけの確固たる気持ちを持てなかった。

ペラペラとうまい言葉を並べる木村を突き飛ばしてやりたい衝動に駆られる一方で、心の中でなすがままにしている冷めた部分がある。

慎さんとはといえば、案の定、ただでさえ無愛想な顔をますますこわばらせていった。

「嫌だね」

木村の話を一通り聞き終わると、慎さんはぶつきら棒にそう答えた。

「そんなあ……。もちろんお礼はいたします」

木村は作り笑顔を崩さずに食い下がった。

賭け将棋が嫌いな慎さんに、ギャラの話は逆効果だと思いう間もなく、意外にも慎さんは「いくらだい？」と訊き返してきた。

木村はここぞとばかりに僕を肘でつついた。

僕は仕方なく、「五万とか……」と、口ごもりながら答えた。

「安いな。五万じゃあ今時葬式もできやしねえぜ」
慎さんはすぐにそう答えた。

僕は内心がっかりしながら、「じゃあ、十万くらいまでならなんとか……」と言った。

「それは勝つても負けても貰えるのかい？」

「ええ、もちろん。だいいち、勝負によって出したり出さなかったりしたら、賭博になっちゃいますから」

「出演料つてわけだ。そんならいいよ。俺ももう長くはねえしな。葬式代くらい稼がしてもらっても罰ばちは当たらんだけだろ」

交渉があまりにあっけなくいったので、僕は拍子抜けしていた。僕は勝手に慎さんを「孤高の哲学者」のように祭り上げていただけなのだろうか。

駄目を押すように慎さんが言った。

「分かっていると思うがな、小切手とか振込つてのは困るぜ。俺は口座は持っていないえし、銀行つてやつもできれえだからな。現金で十万だ。対局する前にくれ」

僕はなるべく落胆を悟られないよう、努めて明るい口調で答えた。

「分かりました」

社に戻ってプロデューサーに報告すると、「十万だと？ 高すぎるよ、たかが素人に」と怒られた。しかし、ともかく「野宿の王将对美人棋士の対決」という企画は進められることになった。

∟∟∟

撮影許可と村川千亜紀の出演交渉に多少手間取ったが、慎さんと千亜紀の対局は、十月末の平日の昼間に行われることになった。

場所は玉姫公園内に設置された特設ステージ。木村の意向で、将棋盤もわざと薄っぺらいやつをミカン箱の上に置くことにした。番組の主役・どんぺいは登場せず、弟子の若手漫才コンビがリポーター役を務める。

「場所柄、あまり危ないギャグはやめろよ」と、事前にプロデューサー通達が出ているにもかかわらず、漫才コンビは早くも「おじいちゃん、香しいオーデコロンだねえ」、「なんてったって、裸足は健康のもとだよねえ」などと、きわどい客いじりをしている。

村川千亜紀は、もちろん山谷に来るのは初めてとあって、売りの爽やかな笑顔が時折堅くなっているようだ。

それに、晴れていても外気は相当冷たいし、「絵作り」のためとはいえ、戸外でミカン箱に乗せた薄い将棋盤を前に対戦させられるなどというのは、プロ棋士にとっては不愉快究まりないに違いない。

千亜紀は場所に馴染まない派手なコートを着ていた。おかげでますます一種異様な絵になる。番組としては面白いが、危険と隣り合わせでもあった。

僕は一抹の不安を抱きながら、撮影指示をしていった。

対戦を前に、女王様にすり寄る下僕という感じで漫才コンビの片割れが訊く。

「千亜紀さま、どうでしょう、対戦相手の印象は？」

「ええ、何しろ『王将』と呼ばれている方ですから……。お手やわからかにお願いしたいと思っております」

言葉とは裏腹に、千亜紀は早くかたをつけて帰りたいという顔をしていた。

対する慎さんは、いつになく表情にしまりが無い。若い美人を相手に将棋を打つことがそんなに嬉しいのだろうか。

僕はもはや完全に失望していた。

慎さんには、せめてもつと毅然とした態度でいてほしかった。できることなら、タレントとしても結構高額ギャラを取るこの女流プロ棋士に、きっちり土をつけてほしかった。

しかし、この調子ではそれどころか、お笑い番組としても大して面白い絵を撮れるとは思えない。

文字どおり黒山のような人だかりの中で、二人の対戦は始まった。

「慎さん、手加減してやれや」

「べっぴんさんを泣かせちゃいかんぜ」

最初のうちはそうしたかけ声も飛んだが、集まった人数のわりには静かな舞台だった。

あまりに長引いても困るので、一手につき三分以内の早指し。勝負は一本勝負というルールだった。

最初の数はポンポンと進んだが、やがて千亜紀が真剣な表情で考え込む場面が出てきた。制限時間三分ぎりぎりになってから、自信なさそうに駒に手を伸ばす。

「おっとオ、これはどうしたことでしょう。天下の天才棋士・村川千亜紀が苦戦しているようです……」

動きがなく、盛り上がらない映像に気を揉んで、リポーター役の漫才コンビがさかんにはやし立てる。

対局が始まってからの慎さんは、終始無表情だった。

ただでさえ動きのない画面だから、せめて顔の表情くらいは生きた絵がほしいところなのだが、そうした期待も裏切られた。

僕は勝負の行方よりも、この映像をどうやってもたせられるのかということのほうが気になり始めた。これではどれだけ時間をかけても大した絵にはなりそうもない。

しかしやがて、勝負はついた。

予想していたよりはあっけなかった。

勝ったのは村川千亜紀だった。

慎さんは負けて初めて笑顔を見せた。普段あまり笑顔を見せない人だけに、負けて笑う慎さんを見るのは嫌だった。

逆に千亜紀のほうは、勝っても嬉しそうな顔をしていなかった。最後はどこかこわばった笑顔で慎さんと握手したものの、下品な見せ物的勝負をしてしまったことを後悔しているのか、撮影終了後はそそくさとマネジャーと共に高級車に乗り込み、去っていった。

「イマイチでしたねえ。でもまあ、大幅にカットして、笑えるナレーションを入れて編集して、五分くらいのコーナーにはなるかな」

木村が僕の耳許で囁いた。

僕は返事をする気にもなれなかった。

△◆△

千亜紀の事務所から、「これはあくまでもお遊びであり、正式な勝負ではないので、対戦局面の棋譜は出さないでほしい」という注文が社に入ったのは、その日の夜だった。

電話に出た僕は、どっちみち大幅に編集しなければならぬし、将棋番組ではないのだから、正確な勝負の流れなどは映しませんよと答えた。

一応将棋盤を定点で終始捉えていたカメラも一台あったのだが、そのカメラからの映像はほんの二、三カットしか使わなかった。

慎さんと千亜紀の対戦は、十一月の中旬に放送された。

「鼻輪で豆自動車を引く男」と「六本木のおっぱい博士」というコーナーに挟まれ、かなりの制作費をつぎ込んだにもかかわらず、あまりぱっとした印象を残さない映像になってしまった。

プロデューサーからはかなり嫌味を言われた。

放送の翌日、僕の元に奇妙な電話がかかってきた。

あの「野宿の王将」というコーナーの勝負を逐一収めたビデオテープはまだ残っているか……という問い合せだった。

驚いたことに、電話をかけてきたのは、将棋八大タイトルの一つ「王将」第十三代の中塚信郎九段だった。

医師からプロ棋士へ転向したという変わり種で、三十代で名人になり、その後、病気で一時一線を退いていたが、去年カムバックし、名人位奪回に向けて連勝中の伝説的棋士だ。

「ええ、……多分まだ残っていると思いますが……でも、村川さんのほうから、棋譜は公開しないでほしいと言われていました」「うんうん。そりやそうでしょうね」

中塚九段は電話の向こうで、意味ありげにそう言った。

彼は翌日、社に直に僕を訪ねてきた。

新聞や雑誌で写真を見たことはあったが、直接会うのは初めてだった。

前頭葉からきれいに禿げあがり、後頭部に残った髪を無造作に輪ゴムで束ね、丁髷のように垂らしている。五十代だと思うが、肌の艶などはよく、禿げた頭を除けば若々しい。

中塚九段は僕に名刺を差し出し、ていねいに挨拶してくれた。こうなるとむげに断るといわけにもいかない。

僕は彼をビデオ編集室に案内し、あの日、将棋盤を捉えていた定点小型カメラのテープを、一般家庭用のVHSテープにダビングするセットをした。

対局は約二時間で終わる。その間ずっと付き合っているわけにはいかないので僕は部屋を出たが、二時間後、編集室に戻っていると、中塚九段はまだ食い入るようにモニターを見ていた。

ちょうど最後の局面で、村川千亜紀が王手をかけたところだ。

「何か収穫がありましたか？」

腕組をしている中塚九段に向かって、僕は声をかけた。

中塚九段は返事をする代わりに、逆に僕にこう訊いてきた。

「この人、本名はなんというんですか？」

「それが、分からないんですよ。みんなからは慎さんって呼ばれていましたし、将棋盤の裏に墨で『慎』と書いてありましたから、慎のつく名前だとは思うんです。りっしんべんに真実の真と書く慎です。今回の取材でも本名を改めて訊いたんですが、答えられませんでした。おかげで出演料の処理が大変でしたよ」

「何段ですか？」

「いえ、そういうのとは縁のないアマチュアですから……。いくら強いといっても、やっぱりプロには負けるわけですし」

「いや、どうか……。このテープ、貰っていいですか？」

「ええ、そのつもりでダビングしましたから。ただし、内緒ですよ、村川さんの事務所には」

「うんうん」

中塚九段はダビングしたテープを受け取ると、まるで念願のおもちゃを手に入れた少年のように、大事そうにバッグの中にしまい、帰っていった。

∟∟∟

中塚九段の言動は気になったが、年末年始の番組撮りだめのため仕事を立て込んでいたこともあって、その一件はそのまま忘れてしまっていた。

年も押し迫り、深夜のニュースで中塚九段の失踪を知るまではどうしたことか、昨年奪取した王棋戦防衛の対局に現れないらしい。家族にも行方が分からず、捜索願いが出されたという。

「敵前逃亡？ 天才中塚にも老いの壁か？」

そんな見出しがスポーツ新聞の紙面を賑わせた。ワイドショーでも取り上げられたが、芸能人ではないため、それほど大きな扱いにはならなかった。

何が起きたのだろう。

あのビデオの一件と関係があるのだろうか。

僕は気になって、中塚九段が興味を示した慎さんと村川千亜紀の対局の記録映像を引っ張り出してきて、早送りで見してみた。

しかし、何も分からなかった。

序盤戦、平凡な相懸りになりそうところで、慎さんが途中から奇襲をしかける。しかしプロ相手に奇襲戦法は通用せず、最後は追い詰められて……という展開だった。

念のため、今度は巻戻しながら逆に見ていった。

それでも分からず、最後に終盤戦の部分だけをもう一度と見て見直したとき、僕はようやく重大な場面に気がついた。

村川千亜紀が王手をかける三手手前に、その重大局面はあった。慎さんが手にした歩をある場所に打てば、そこから二手先に逆に詰むという局面が。

そしてそれは、ちょうどテレビに映し出された数少ない盤面力ツトの一つでもあった。ほんの数秒映し出されたその画面から、中塚九段はすっかり勝負の分かれ目を見抜いていたのだ。

問題は、慎さんがそこまで相手を追い詰めながら、みすみす勝利を逃してしまったということだった。いくら善戦しても、負けは負けだ。しかし……。

僕は思い立ち、今度は二人の表情を追っていた別のカメラからの映像を収めたテープを捜し出して、盤面の進行状況にシンクロさせながら、そのときの二人の表情を捜し出した。

そしてついに見つけてしまった。

慎さんがかすかに笑みを浮かべてから、わざと歩を打たなかつ

たことを。

そのときの村川千亜紀の表情の変化も、カメラは的確に捉えていた。負けたと思った瞬間、なぜか相手が別の手を打ってきた。安堵。そしてその後、改めて訪れる懐疑……。

恐らく彼女は、時間が経つにつれ、慎さんがわざと負けたのだということを確認したのだろう。あれだけの駒組をする男が、あの場面で詰めを誤るはずがないと。千亜紀の事務所は、千亜紀が「野宿の王将」にひとひねりされてしまったことを知り、かなり慌てたに違いない。勝ったことにはなっているが、詳しい棋譜がテレビで放送されれば、将棋が分かる人間に見抜かれる恐れもある。だからこそそのあの電話……。

もはや、慎さんが村川千亜紀にわざと負けたことは疑いようがなかった。

もしかしたら、あの後、千亜紀の事務所は慎さんに改めて接触し、口止め料のようなものを渡しているかもしれない。となると、証拠のビデオテープがプロの手に渡ったと知ればどうなるだろう？
まさか……。

僕はその想像を一笑に付そうとした。

しかし、現実にあのビデオテープを社の外に持ち出した中塚九段が失踪しているのだ。

万一、僕がああのテープを中塚九段に渡したことが、彼の失踪事件と何らかの関係があるのだとすれば、僕自身の身边も穏やかではなくなるかもしれない。

とりあえず、慎さんに会おう。

会って、なぜあのとときわざと村川千亜紀に負けたのか、確かめてみよう。

そう思いながらビデオテープを片づけ終わったときには、もう外は明るくなっていた。

僕はそのままタクシーを拾い、山谷に向かった。

凍てつくような冷たい朝だった。

誰もいない派出所の前を通り過ぎたあたりでタクシーを止め、料金を払っていると、後方から救急車がサイレンを鳴らしながらやってきて、停車中のタクシーを追い越し、すぐ前の路地に入っていた。

また誰か倒れたのだろうか。年末だというのに、この寒さの中で誰にも気づかれずに。

僕は徒歩で救急車の後を追った。

路地を少し入ったところに、救急車は回転灯を点けたまま停車していた。路地の両側には簡易宿泊所が並んでいて、救急車が横付けした建物もその中の一軒だった。

「ベットハウスあかね」。

消えかけた看板の文字は辛うじてそう読める。どういうわけか、山谷にある宿泊施設の多くは「ベットハウス」と名乗っている。

「ベットハウス」ではない。まるで賭け事（bet）をする場所のようだが、そうした表記ミスがまた独特の風情を醸し出している。

「ベットハウスあかね」から、誰かを乗せた担架が運び出されて、素早く救急車に押し込まれた。

それに付き添うようにして乗り込む中年男性の顔を見て、僕は思わず立ち尽くし、そしてすぐに声をかけた。

「中塚さん！」

中塚九段はちらりと僕のほうを見たが、返事もせずにそのまま救急車とともに去っていった。

失踪中の中塚九段はここにいた。

ということは、今、救急車にかつぎこまれた人物こそ、彼が大

事な王棋戦タイトルを放棄してまで対戦したかった相手……：慎さんではないか？

僕は走り去る救急車を茫然と見送っていた。

「いやあ、惜しかったなあ。しかしあの無敵の慎さんがなあ」

「いや、体調が悪かったんさ。身体が元気なら、あんな青二才に負けるはずがねえ」

宿泊所から出て、救急車を見送った男たちが、口々にそんなことを言っている。

僕はその輪の中に入って、事情を訊いた。

「ああ、あんときのテレビ局の人かい」

中の一人が僕の顔を覚えていて、教えてくれた。

「この前のあの娘っことの将棋はなあ、あああ、慎さんが愛嬌でわざと負けたんよ。金貰っちゃまった以上、プロに恥かかせるわけにはいかんと思っただんじゃねえかな。でも、今度のは違ったなあ。あのおっさんとは真剣勝負だったぜ。」

しっかし、あのおっさんも変わってたよ。ここに毎日泊まりこんでよ、慎さんと五番勝負をやってたのさ。いやあ、一手指すのに半日とかかかるんじゃないやなあ。俺たち、いくら暇だったって、つき合いきれねえよ。

そんでさ、二勝二敗の五分の後、三日がかりの大勝負の末に、とうとう慎さん負けちゃまったんよ。惜しかったなあ。そんで、精も根も尽きたんだろなあ。ぼったり倒れちゃまってよ。大丈夫かなあ。

俺、福祉センターに来ている女の医者さんに聞いたことあるんだよ。慎さんはもう相当身体が悪くなってるから、野宿は絶対駄目だって。でも慎さんは頑として言うこと聞かねえしさあ。なぜなんだろうなあ。あんなに病院嫌いな男も珍しいよ。絶対に医者にかかろうとしねえんだ。女の医者さんも、最初は相手こずった

もんだよ。何年もかかって、少しずつだっ子をあやすようにしながら、ようやくあの女の医者さんにだけは少しだけ診てもらおうようになったんだよ。それでも貰った薬は吞まねえし、病院を手配するって言われても知らん顔だし……。

もう長くねえってことは、本人がいちばんよく知っていたんだろうなあ。だから、あのおっさんにもそう言ったんだよ。そして、なんだか逆にますますフアイト燃やしちまったみたいでさあ。今すぐ勝負をしたいって言い出して、最初は神社の境内で始めたんだ。あんまり長引きそうだったんで、あのおっさん、この宿を借りて、勝負の場を移したんだ。

でもまあ、慎さんも本望かもなあ。好きな将棋をぶっ倒れるまでやるなんてさあ……」

この男も含め、ここでは誰も慎さんの対戦相手が、プロ棋士・中塚伸郎九段だとは未だに気づいていないようだった。あるいは、気づいていても、知らん顔をしていたのかもしれない。慎さん一生一代の大勝負の邪魔をしないようにと。

僕は話をしてくれた男に案内されて、宿泊施設の二階の一室を覗いた。

すり切れた畳の四畳半は、それでもその簡易宿泊所では特等室らしい。中央には、慎さん愛用の、黒ずんだ薄い将棋盤が置かれている。中塚九段にしてみれば、こんな粗末な道具で将棋を打つのは久々のことだっただろう。

駒はまさに勝負がついた瞬間そのままだった。

僕は暫くその投了時の棋譜を読みとろうと、盤面を覗き込んでいた。

いつのまにか宿のおかみがやってきて背後から声をかけた。

「なんだかこの部屋には物凄い執念のようなもんがまだ漂っているようにね。ちよっと下手に片付ける気になれないよ」

僕は宿の外へ出て表通りまで走った。

五分ほどで、タクシーを拾うことができた。「〇〇病院をお願いします」

僕は山谷で倒れた者たちが必ず運ばれる救急指定病院の名前を、運転手に告げた。

△▽△

病院のロビーは閑散としていた。

まだ朝早いということもあったが、年末の休診期間に入ったよ
うで、外来患者の姿もなかった。

そのロビーのソファに、中塚九段は一人ぼつんと座っていた。

「中塚さん」

僕が声をかけると、中塚九段は無言のまま充血した目を向けた。
「亡くなったんですか？ 慎さん」

「いや、集中治療室へ運ばれるのを見送ったときは、まだ息はあ
りましたよ。でも、もう駄目でしょう。私が引導を渡したような
ものだね」

そう言うと、中塚九段はかすかに口元を歪めた。笑っているよ
うにも、泣いているようにも見えた。

「凄い人でしたよ。変形石田流とでもいうのかな。今の棋界で、
あんなふうに序盤からぐいぐい押してくる戦法の人って、いない
ですよ。最初の一戦は面食らってしまった、それであつという間
に負けました。」

でも、奇襲戦法や強行策ってのは、どうしてもがちり組みま
れと弱点をさらしやすいいもんでしてね。第二戦、第三戦はかなり
の長期戦の末、私の勝ち。その後、第四戦は千日手になって引き
分け。第四戦でケリをつけるつもりだったんですが、逆にあの人
の、これまた歴史に残るような物凄い駒組にしてやられました。

あれは凄かった。あの一戦は、私の一生の宝になるでしょうね。でも、それで精魂突き果てたのか、最終戦では私の勝ち。ついさっきのことですよ。

しかしね、あの人の体調がよければ、あるいはあと十歳年が若ければどうなっていたとか……。

心配して、福祉センターに来ている女医さんが、何度か様子を見にきたんですよ。その人からこっさり聞いたんですが、あの人、末期癌と肺気種で、もう、いつどうなってもおかしくないそうです。

私が、王棋戦を放棄してでも対局しなければならなかったのは、そういう切羽詰まった状況だったからです。彼のような天才とは、これから先、もう二度と出合えないかもしれません。王棋なんて、いつでも取れます。名人も棋聖も王将も、今の私の力なら必ず取れます。彼との勝負に比べれば、恐らくこれから先の私の人生におけるすべての勝負はどうでもいいものだと言っても言い過ぎではないでしょう。私ももう五十三だしね。

でも、よかった。ようやく彼に会えた。生きていたんですね……」

「え？ どういうことですか？」

黙って聞いていた僕は、そこで思わず問い返した。

中塚九段はすぐには答えずに、僕に隣に座るようにと促した。

僕は一メートルほど間をあけて、同じソファの端に腰を下ろした。

「中塚さん、慎さんをご存じだったんですか？」

僕は腰を落ちつける間もなく訊いた。

「いや、そういうわけではないんだが……」

中塚九段は口ごもりながらも、必死に次の言葉を搜しているようだった。

「彼が慎さんと呼ばれていると知って、もしかしたらあの『攻めの慎治郎』ではないかという思いはよぎったんですよ。でも、あんなところであんなふうにしていたとはね」

「攻めの慎治郎」……。慎さんが「慎さん」という以外の呼び方をされるのを、僕はそのとき初めて聞いた。

「私、実は父親が中国人でしてね……」

突然、中塚九段はそう切り出した。

慎さんとの関係を説明するのに父親の話から始めなければならぬのだろうか。

僕は戸惑いながらも、彼の次の言葉を待った。

中塚九段は、誰も座っていない向かい側の壁際のソファのあたりを見据えたまま、話を続けた。

「私の父は山東省の生まれで、十八歳のとき、日本へ留学してきてんです。中塚家というのは戦前に満州との貿易をやっていたことがあつたので、その関係で、私の父を見だし、書生として身元を引き受け、日本へ連れてきたらしい。ゆくゆくは中国側の窓口として、日中両国語に堪能な配下に育て上げるつもりだったんです。実際、中塚家の奉公人のような形で仕事も手伝い始めていたようです。」

そんな中で、父は中塚家の末娘とできてしまつて、娘を妊娠させたんですな。その直後、父は仕事の関係で中国へ渡つたきり帰つてこなかった。

奉公人の分際で主の娘をはらませたことがばれるのを恐れたのか、それとも、大陸での日本軍や日本企業の横暴ぶりに我慢がなくなつたのか、そのへんのことにはよく分かりません。とにかく日本へは戻らなかつた。

中塚の末娘は母方の実家へ引き取られ、そこでひっそり男の子を産みました。それが私です……」

長い話になりそうだった。

僕は今頃、集中治療室で生死の境をさまよっているであろう慎さんの容態を気にしながらも、中塚九段の話につき合う覚悟を決めた。

中塚九段は、僕の存在など関係ないかのように、淡々と話し続けた。

「中国に戻った父は、東北人民革命軍という組織に加わり、抗日運動のリーダーになっていったんです。後に紅軍や反日義勇軍と合体して、「抗聯」と呼ばれるようになるんですが、太平洋戦争開戦後も、そのリーダーの一人として活動していたようですね。

そして父は日本軍に捕らえられ、最終的に、石井部隊の特設監獄へ送り込まれたんです。

石井部隊……ご存じでしょう？ 七三一部隊とも呼ばれてますよね。あそこの口号棟と呼ばれる監獄は、生体実験用に捕らえられた中国人捕虜たちの収容所だったんです。

そこには、主に普通の拷問では口を割らないような、筋金入りの愛国者や反日運動のリーダーたちが選ばれて送り込まれたとも言われています。私の父もその一人だったわけです。

ところが、七三一部隊に、父を知っている将校がいましたね。中塚家とも縁の深かった人物で、中塚家の奉公人として働いていた父のことを覚えていたんです。

その将校というのが大変な将棋好きで、軍の中ではほとんど無敵を誇っていたそうなんです。数少ない負けの経験させられた一人が、書生時代の父だったんです。

私の父は相当将棋が強かったらしい。中国将棋というのは今の日本の将棋とは大分違うものなんです。父は日本にきてから将棋好きの中塚家当主の相手をさせられるうちにめきめき腕を上げたらしく、ある時期からは無敗を誇っていたそうです」

「遺伝ですね」

僕は何気なく、そう、合いの手を入れた。

「遺伝？ 私がですか？ そんなもの、遺伝するものですかね」

中塚九段は、面白くもなさそうに答えた。

一、二秒、中途半端な沈黙が訪れたが、中塚九段は構わず、話を続けた。

「で、その将校は、捕らえられていた父にこう提案したんです。

『俺の部下に、将棋の天才がいる。ほとんど負け知らずの俺も、その男にはまったく歯が立たない。俺が今まで将棋で負けたのは、その男とおまえだけだ。どうだ、その男と勝負してみないか。おまえが勝ったら、捕虜の待遇を改善してやる……』とね。

勝ったらどうのという約束を将校が本気で守るつもりだったかどうかは怪しいんですが、とにかく父は悩んだ末に、その申し出を受けることにしたんですね。毎日、無惨な死に方をしていく仲間たちのために、何もしないよりはましだと思ったのでしよう。約束が反故にされたとしても、憎い日本軍人に一泡吹かせてやれると思ったのかもしれない。

勝負は本格的な五番勝負だったそうです。

特別室が設けられて、手のあいている連中はみんな見物にきたそうです。

で、そのとき、父の相手になった日本軍の若い兵卒というのが、原田慎治郎……つまり、さっきまで私と勝負していた、あの慎さんですよ」

中塚九段はそこまで言うと、背中を伸ばし、僕のほうに向き直った。

僕は思わず組んでいた足をほどいた。

「それで、そのときの勝負は……つまり、若い兵卒だった慎さんと、中塚さんのお父さんの勝負はどうだったんです？」

僕は訊いた。

「父はまったく歯が立たなかつたそうですよ。あつと言う間に三連敗してしまつたそうです。将校は、父を相当な腕だと吹聴していたようで、面目丸潰れとなつて面白くなかつたのでしようね。

その後、父の特別待遇をやめて、さつさと実験用の『丸太』として扱つたそうです。凍傷実験、無麻酔での骨折手術実習などを経て、最後はチフス菌に強制感染させられて死んだようです」

看護婦が一人、そばを通りかかつた。

中塚九段の話の一部が聞こえたのだろうか、ぎよつとしたような顔を一瞬こちらに向けたが、立ち止まることもなく、足早に通り過ぎていった。

看護婦が廊下の角を曲がるのを見届けてから、僕は小声で訊いた。

「しかし、そんな話を、どうしてご存じなんですか？ お父さんはそこで亡くなられたわけでしょう？」

「ええ。私が直接父から話が聞けたわけではありませんよ、もちろん。戦後大分経ってから、部隊の生き残りの人たちから聞いた話です。私は苦学した後、医学部に進みましてね。どういう因果か、大学で、七三一部隊で陸軍の嘱託医として働いていた人物が教える研究室の一員になつたんです。酒の席で、教授がほろりとその話をしましてね。あの中国人を負かした『攻めの新治郎』とと原田慎治郎こそ、もしかしたら日本一の将棋指しだとね。もちろん、自分の生徒の一人、つまり私が、そのときの中国人の落とし種だとは思ひもしないですね。

私はその前に、在日中国人のグループを通じて、自分の父親が戦時中いかに勇敢に日本軍と戦い、どんな死に方をしていったか、ある程度聞かされていました。将棋の話は別にして。

将棋に興味を持ったのは、そのときでしたね。それまでは駒に

触ったこともなければ、駒の動かし方さえ知らなかった。医者になるための勉強一筋でしたから。しかし、将棋を始めると、すぐに熱中してしまった。そのうち、他のことはどうでもよくなってしまうんです。同時に、今の医療のあり方なんかにもどんな疑問を抱くようになりましてね。父を生きたまま解剖したよ。うな連中がリードしている医学界にもほとほと愛想が尽きました。すべてを放り出して将棋ばかりやるようになってしまった。

しかし、平和つてのはありがたいもんですよ。気がついたら、将棋で飯が食えるようになっていた。今のこの姿を、父に見せた。いような隠したいような、複雑な気持ちですよ」

そのとき、白髪混じりの看護婦がやってきて、こう告げた。

「残念ながら、やはり駄目なようです。最後、お立ち会いになりますか？」

看護婦の言葉が終わらないうち、僕は弾けるように立ち上がった。

看護婦に案内され、三階の集中治療室へ行くと、出会い頭に三十代半ば、つまり僕と同年代に見える医師が出てきて言った。

「ご家族の方ですか？」

「いえ、知人です。慎さんは？」

「残念ですが、もう意識が戻られることはないでしょう。やれるだけはやりましたから、あとは静かに見送ったほうがいいと思いますが、どうしますか？」

「はい」

何の決定権もないはずだったが、僕は反射的にそう答えていた。僕は部屋に入った。

ベッドの上の慎さんは、顔がすでに土色で、とても生きているように見えなかった。

手を握ったが、温もりは感じられなかった。

今頃、最後の棋譜を思い出しているのだろうか。いや、この状態でそれだけの精神活動ができるとも思えない。あとはもう、安らかに旅立つことを祈るしかなかった。

一時間後、慎さんは意識が戻ることなく、静かに息を引き取った。

∟∟∟

慎さんの葬式は、ささやかながらも福祉センターで行われ、多くの仲間が集まった。その費用として、慎さんはあの番組で手にした出演料を、福祉センターの女医さんに預けていたということも分かった。「葬式代くらい……」というあの言葉は、まさにその通りだったのだ。

中塚九段はその後順調にタイトルを奪い返し始め、今では「平成の天才棋士」「遅れてきた異色の天才」などと呼ばれ、将棋界に中塚時代を築いている。

村川千亜紀は、小説やエッセイもこなすマルチタレントとして、このところテレビでの仕事ぐんと増えた。

彼らの活躍を見聞きするにつけ、僕はその才能と実力をほとんど知られずに死んでいった慎さんのことを思い出す。

唯一の救いは、慎さんが最後にようやく自分と同レベルの相手と対戦できたということだ。僕自身は、慎さんに軽蔑されていたと思うが、あの番組がきっかけで慎さんに最後の舞台を提供できたのだと思えば少しは気が楽になった。

僕の手元には、慎さんが村川千亜紀にわざと負けたときの棋譜

が残っている。残されたビデオを廃棄する前に、僕がノートに書き起こしたものだ。

しかし、慎さん一世一代の勝負となった中塚九段との五番勝負の内容は、今では誰も正確には知ることができない。

中塚九段には、慎さんの葬式の後、こっさりこう質問してみた。「それで、中塚さんは慎さんに、ご自分があのとときの中国人の息子なのだと告げたのですか」と。

中塚九段は苦笑しながら答えた。

「いや、言えなかったな」

慎さんが、なぜ死ぬまで頑なにプロになることを拒否し続けたのか、山谷では永遠の謎として語り継がれている。

その謎を解き明かす番組を作るべきかどうか、僕は今、真剣に悩んでいる。

(執筆・一九九二年。未発表)

◆『野生時代』という雑誌からの依頼で書いたものですが、原稿を渡した後、編集長に「面白い！ 掲載号を決めるから待っていて」と言われ、待っているうちに編集長が別の部署に異動。雑誌も休刊に……。。